

# 糸を紡ぎ、布を織る女性たちの繋がり

田中由美子さん  
愛荘町竹原

麻を育て、糸を紡ぎ、布を織る。「近江上布」は、鈴鹿山系を水源とする伏流水の恵みから生まれた湖東の伝統的な工芸品である。彦根藩井伊家の保護により発展し、近江商人によって全国に広がった近江上布。伝統の技や意匠を受け継ぎながら、その普及、発展に情熱を注ぐ「麻々の店」の女性たち。リーダーの田中由美子さんを中心に麻で繋がる「地域愛」は、ここから拡がっていく。



## 手仕事でつくる麻の魅力

店内に入ると、そこにはやさしい空間が広がっていた。可愛くて品のいい服や小物、ショール、手拭い、バッグなどのほか、布や糸、機織り（はたおり）機や反物などの「麻づくし」に、取材に来たことも忘れてしまうほど、すっかり見入ってしまった。

鈴鹿山系を水源とする愛知川、大上川の伏流水は、良質の米や酒とともに麻織物という産業を地域にもたらした。近江上布の伝統、技術、意匠は、彦根藩井伊家の後ろ盾と近江商人によって全国に広がった。平成二十一年四月、近江上布伝統産業会館をリニューアルした時に、「麻々の店」はオープンした。活動目的は、国内でも数少ない麻織物の産地である愛荘町からの情報発信。昔ながらの手仕事でつくる麻の魅力を地元や県内外の消費



右上：『麻々の店』で活動について熱く語る田中さんと西川さん。西川さんは近江の麻に魅せられてスタッフに。お客さんが安心して麻製品の相談が出来る麻マイスターを目指している。  
右下：赤ちゃんの肌に優しいファーストシューズ。  
左：天然繊維のなかでもひとときわさわやかな感触を持つ麻。素材自体の白度が高く、発色が良いので、日本の伝統色がもつ独特の涼感が再現される。

者に伝えることであった。

代表を務める田中由美子さんは、生まれも育ちも地元の出身で、両親と夫との四人暮らし。以前は、愛荘町立歴史文化博物館に勤務していたが、平成八年に企画した近江上布の展示会がきっかけで、「麻」と出会った。古来より続く伝統の技、織りや染色などさまざまな工程を受け持つ伝統工芸士の存在。「絹糸」より扱いが難しいという「麻糸」を紡ぎ、織る技術とそこから生まれる独特の風合い、色合い。地域の文化、産業としての麻の魅力を知った田中さんは、近江の麻研究会の立ち上げに加わって以来、意欲的に活動を継続してきた。「麻々の店」を開設して五年目。現在は、二名の女性スタッフ（西川幸子さん、野村仁美さん）とともに、企画・運営・情報発信にあたっている。

## 変わりゆく地域

田中さんの住まいは、昔ながらの和風の家。四方が田んぼに囲まれ、自然な風が通りぬける自宅は、夏にはエアコンや扇風機が要らないそうだ。  
代々、梨園を営んできたが、両親の高齢化により経営を断念、惜しまつ、今年、閉園した。子どもたちから姉と一緒に、梨園や田んぼの仕事で忙しい両親の手伝いをしてきた。だから、今でも農作業は大好き。「愛荘町が好き！雪深いところも好き！地域の古墳や遺跡なども知っているから、歴史も好き！知れば知

右ページ：近江上布を織る「高機（たかばた）」にかけられた縦糸。光沢のある繊細な麻糸から耐久性のあるしなやかな麻布が生まれる。「麻々の店」では、機織り体験ができる。

左上：『麻々の店』スタッフの野村仁美さん。愛荘町と麻を愛する活動的な女性。



右：江戸時代に高宮布を織っていた天秤腰機を使って機織りの実演をする立石文代さん。  
 中：伊吹山文化資料館（米原市泰照）で機織り教室の指導する田中さん。麻繊維の取り出しかたや糸車を使った糸振りなどの伝統的な技術を子どもたちに体験させている。  
 左：江戸時代から伝わる「愛知川びん細工でまり」については、43ページのほととSPOTを参照。

「織り人（おりびと）」の暮らすまち  
 『麻々の店』の今後の抱負や、愛荘町のまちづくりについて田中さんは、さらに語る。  
 「近江上布だけではなく、麻を周知させたい。産地である地域に店があることに、大きな意味がある。地域愛にあふれた人たちが、趣味ではなく、ちゃんと修行をして、織りが好きな（織人（おりびと））になつてくれたら素敵ですね！」  
 「私自身、麻畑作りも好きなのですが、仕事と家庭と麻畑仕事となると負担が大きいので、どなたかに協力してほしいですね！」麻を栽培し、紡ぎ、織る。そういう仕事に興味のある若い人たちが、都会から移り住み、田舎暮らしをしながら麻織人を目指す。  
 『麻々の店』に織人さんと織人を目指す人たちがたくさん集い、麻織りを学ぶ。そして織りの音が毎日びびく会館となる日を思い描いて田中さんたちの活動は、これからも続く。

ありながら、愛荘町には、今も、麻の生産地が残り、産業が現存している。  
 『滋賀県の中で《高島の綿》や《長浜の浜ちりめん》などの伝統産業が残っているが、すべての工程において手作業の近江上布が、産地・産業として継承されていることは本当にスゴイことなんです。』  
 栽培、糸紡ぎ、機織りまで、手作業で行う工程は、想像をはるかに超えた作業なのだ。ここで、実演できる職人さんは、わずか二人しかいません。糸を紡いで、機を織る技術を継承させるためにも、地域愛にあふれた人たちを集めてグループを作りたいのです。体験した子どもたち



るほど好きになるんです。子供の頃、手づかみで魚を取った川。一面にひろがる水田風景。瓦屋根が連なる伝統集落。県外から来るお客さんに「いいところですね」と言われ、気づかされたことも少なくない。  
 しかし、いいことづくめではない。高齢化によって過疎化し、空き家が目立ち始めた集落の現状。その一方で、田畑が埋め立てられて、新興住宅地が出現する地域の将来への不安。『麻々の店』は、そうした現実を冷静に見つめながら、地域の未来を伝統の《麻》で切り拓こうとする女性たちの静かで、創造的な活動の場なのだ。

近江上布が《麻》であることの魅力

現実的に、伝統工芸の伝承はとても難しい。それは、『麻々の店』で働くスタッフ全員が感じていることである。しかし、それでも田中さんは近江上布について、力をこめて語る。  
 「なによりも大きな魅力は、近江上布が《麻》であることですね。」  
 ルーツは江戸時代の「高宮布」にさかのぼる。鎌倉時代に京都から職人が移り住んで、麻織物の技術を伝えたのが始まりといわれている近江上布。江戸時代初期には、彦根藩の献上品とされていた。しかし、明治以降の機械化や木綿が普及するなど、麻の需要が劇的に減少してしまっただけだ。このように厳しい状況下

# 「二地域居住」のすすめ

奥貴 隆 滋賀県彦根市

都市と地方。それぞれのよさがある。都会に住む人は、田舎暮らしに憧れ、田舎に住む人は、いつか都会で暮らしたいと考えている。しかし、考えるより行動。働き盛りの人は、週末滞在型の田舎暮らし別荘と考えればよい。第二の人生を考える人は、長期滞在型の旅を続ける。あるいは心の持ち方で考えてみた。どうだろうか。

そこで「二地域居住のすすめ」である。聞き慣れない言葉で、アンケートで聞いても七割の人がよくわからないと答えている。しかし、考えるより行動。働き盛りの人は、週末滞在型の田舎暮らし別荘と考えればよい。第二の人生を考える人は、長期滞在型の旅を続ける。あるいは心の持ち方で考えてみた。どうだろうか。

「都立」「田舎」。それぞれに生活する場をつくる。思いがけない人や地域とのつながりができてくる。新しい土地の歴史・文化・暮らしに刺激された「創造的な田舎」が見えてくる。



## 小江戸ひこね町屋情報バンク

彦根商工会議所町屋活用委員会「小江戸ひこね町屋活用コンソーシアム」

400年の歴史を伝える城下町彦根。春の桜、秋の紅葉シーズンは、歴史散歩に訪れる観光客でまちなかにはひときわ賑わいを見せる。最近では、夢京橋キャスルロードや四番町スクエアなど、新しい街並み整備が進み、まちあるきスポットが増えている。近くには、銀座商店街、中央商店街、花しょうぶ通り商店街、リーパーサイド橋本商店街など昭和レトロな店が軒を連ねている。

人気の彦根まちなかで、最近、空き家・空き店舗が目立つようになってきた。これらの建物の中には、伝統的な木造家屋や町屋の形をとどめたものがあり、その活用について関係者で検討されてきた。その取り組みの成果が「小江戸ひこね町屋情報バンク」である。バンクの運営組織は「小江戸ひこね町屋活用コンソーシアム」。彦根商工会議所町屋活用委員会を中心に、彦根市、滋賀大学、滋賀県立大学、NPO法人五環生活、湖東地域定住支援ネットワーク、芹橋二丁目連合自治会まちづくり懇話会の7団体が構成されている(図参照)。

「小江戸ひこね町屋情報バンク」では、①空き町屋の情報収集・発信 ②空き町屋所有者および活用希望者に対する相談・コンサルティング ③空き町屋の管理業務ほかの事業を実施しているが、活動の中心は、空き家となっている町屋に関する情報の公開と仲介である。バンクの運営には、商工会議所町屋活用委員会メンバーの不動産仲介会社が係わり、分譲・賃貸物件の紹介・契約を担当している。

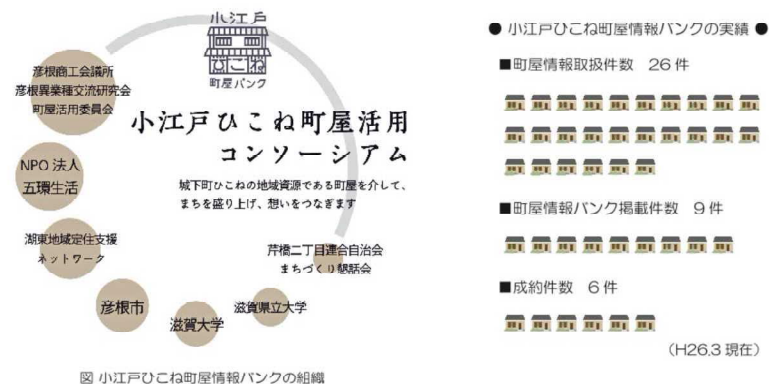


図 小江戸ひこね町屋情報バンクの組織

● 問い合わせ先 ●

小江戸ひこね町屋情報バンク事務局  
(彦根商工会議所小江戸ひこね町屋活用コンソーシアム内)  
営業日 月・水・木・金  
営業時間 10:00～18:00

〒522-0083 滋賀県彦根市河原二丁目2-38  
TEL 0749-23-2123 FAX 0749-26-2730  
E-mail info@hikone-machiya.com  
http://www.hikone-machiya.com/index.shtml



右：滋賀県立大学キャンパス管理棟。背景は、琵琶湖とともに湖国風景を象徴する伊吹山。  
左：東京の住まいがある光が丘パークタウンの街並み。ユリノキの街路樹が美しい。昭和48（1973）年から計画がスタートし、昭和56（1981）年～平成3年（1991）年にかけて建設、入居。開発面積186ha、人口約2万9000人。日本最大の住宅都市再開発プロジェクトである。このプロジェクトに携わったことがきっかけで住み始めて、早31年の歳月が流れた。



東に連なる鈴鹿山系から昇る朝日。冬から夏にかけて、太陽が出る位置が、南から北へ少しずつ移動していく。滋賀に来てから、朝日、夕陽、月の満ち欠けを日々感じて暮らすようになった。

### 「普通」のこととして受け継がれてきた「日常」

長年暮らした東京を離れ、滋賀湖国で暮らすようになって程なく、気づいたことがある。それまで東京の日常を日本そのものであると思っていたことが、実は、大きな錯覚であった。東京と滋賀を行き来すること十八年。今、私のなかのモノサシは、滋賀県あるいは滋賀に代表される地方の暮らしこそが日本そのものであるとリセットされている。以来、テレビの画面とおして伝わる東京発の政治・経済・社会の情報や情景、そしてそこに登場する人々たちを、都市と地方という二つの尺度で対比的に捉えることができるようになった。そのうえで歴史・文化・暮らしを継承してきた地方の存在が、かけがいのないものになってきた。

このことを語ったときによく返される言葉に「自分たちには、普通であり日常そのものであって、特別な思いはありません」と。しかし今の時代に価値があるのは「普通」のこととして受け継がれてきた「日常」そのものなのだ。滋賀で育ち、東京で暮らしたことのある若い人が、こう語ってくれた。「自分は、滋賀県には何も無いと思いついて、東京に出ました。そして、十年間、東京で暮らしてみても、気がつきませんでした。滋賀にあったものが、東京には何ひとつない」と。

### 「田舎」への憧れ

私の「田舎」への憧れは、小学校時代に遡る。夏休みになると田舎に帰る同級生たちが、羨ましかった。昭和二十〜三十年代の東京郊外は、今、思いおこしてみれば十分に田舎だった。雑木林が続き、低地を流れる川に沿って田んぼがあり、麦畑やサツマイモ畑のなかに通学していた。記憶のなかでは、よく雪が降った。夏休みは、セミ、

カブトムシ、クワガタ、ギンヤンマ、ザリガニ、タニシ、ドジョウ、フナ……。取り放題だった。友達の家で庭先で、柿を食べ、栗を拾った。それでも同級生たちが帰る「田舎」での暮らしに憧れを抱いた。境界も定かではない広い敷地に、納屋があり、土間があり、母屋へと続く。開け放たれた座敷をひんやりと通り過ぎる風。木と紙と土でできた家。自分たちの住む家とは別の空間がそこにはあった。すべてが自然の一部であるような、そんな家に住みたいと思いつきながら、いつか忘却の彼方に……。

### 古民家探し

琵琶湖岸の集落に隣接する大学キャンパス。研究室の窓からは、琵琶湖に沈む夕陽を受けて、鈍く輝く瓦屋根の連なりが見えた。伝統的な集落の懐かしさ、種やかな風景。そこに住む人にとっては日常の風景が、私には特別なものとして目に映った。美しくかった。民俗学の創始者である柳田國夫が一九四〇（昭和十五）年に発表した「美しき村」のなかに次のような一節がある。「村に住む人のほんの僅かな気持ちから、美しくもまづくもなるものなどといふことを、考えるような機会が私には多かつた」（『定本柳田國夫集第二巻』『豆の葉と太陽』所収、原文のまま）。さらに、遠く離れた各地の村やまちが、皆同じような佇まいをもって存在していることへの不思議さも書かれている。

湖国に移り住み、古民家に暮らす。行動に起こすまでにかんがりの時が経過したが、三年前の春、大学からほど近い集落にある一軒の古民家と出会った。大正の中期に建てられた母屋は、こじんまりながら、たたき粘土の土間があり、四部屋の和室が田の字に配置された伝統的な造りの家だった。増築した鉄骨造の建物が蔵のように母屋の東側に寄り



右：改修後のキッチン。壁を取り払ってアルミサッシを入れ、室内を明るくした。



左上：改修前の台所と和室。



左下：電気式床暖房は、設計・施工が容易で、古民家の改修に適している。工事費も安い。



右上：土間を改修した広めの玄関。千本格子戸は、大正時代の古建具を使った。



右下：キッチンと和室を改修し、12畳大のリビングダイニングとした。化粧合板の天井を剥がし、本来の「さら天井」を復活させた。電気式床暖房と天井裏断熱材の寒さ対策で冬も快適に過ごせる。



左上：田舎暮らしを象徴する伝統的な田の字型の座敷。



左下：夏は、扇風機の風が涼しく、心地よい。

添っていた。  
広い庭先には、小さな畑がいくつかあり、春植えの苗が植えられていた。今までこの家に暮らしていたおばあさんが、丁寧に育てていた野菜だった。古民家に暮らし、菜園生活。漠然としたイメージが、いつの間にか目の前で具体的な形になっていった。滋賀に暮らし、東京と行き来する二地域居住の古民家生活が、この時にスタートした。

### 古民家改修実践レポート

私が住むことになった家は、増築部分を含めて八室あった。そのうちの三部屋には、県立大学の学生が下宿生として世話になっていた。古民家探しては、予備的な知識を得ることも含めて、十件ほどの建物を見させてもらった。旧中山道の宿場町高宮では、商家の本宅を紹介された。一階だけで十部屋。二階にも四、五部屋はある大きな家で、玄関からおくどさんにつながる通り土間があった。柱、梁、建具、家具、床の間。どれをとっても本格的な日本家屋であった。そして見事な蔵と庭園。都会人であれば誰もが憧れる家であり、庭である。しかし、二地域居住の家としてはどう考えても贅沢過ぎるうえに、借りて住むにはいかに。また、江戸時代にまで遡る古民家は、文化的・民俗的・建築的資源として貴重なものであり、地域のためにあるべきだというのが、私の到達した答えだった。以来、この古民家について、いろいろな関係者の協力を得ながら、地域の将来につながる活用方法を探っているところだ。

彦根や近江八幡のまちなか、あるいは農村集落の民家など数多くを見て回った結果、大学に最も近く、しかも学生が世話になっていった民家にたどりついたということになる。この家に刻みこまれた時を感じながら、これからの暮らしに思いをはせた。

滋賀の住まいとして快適に暮らすために、次のような考えで改修を行った。①伝統的な間取りは変更しない。②母屋の改修されている部分は古民家本来の姿に戻す。③キッチン・浴室・洗面所・トイレなどの水回りを、現代設備に置き換える。④主要な部屋に床暖房を取り入れる。⑤サッシは二重サッシ（一部ペアガラス）とし、床・壁・天井の主要部分に断熱材を入れる。改修を終え、住み始めて二年。外観は、前と変わることなく、内部は、新築住宅並みの住み心地で、冬に炬燵を使うこともない。オール電化の簡便さもあり、いたって快適な二地域居住ライフである。

### 自分流のライフスタイルを探す

地方暮らしを思い描く人それぞれに、都会暮らしで無意識に封じ込めてきた自分流のライフスタイルがあるはずだ。絵画・彫刻・陶芸・工芸・音楽などの芸術活動、園芸・野菜・果樹などの農園活動、パン・ケーキ・ゼラクト・フラワー・クラフト・カフェなどのショップ経営。まちなか、集落、中山間、それぞれの暮らしに溶け込みながら、自分流のライフスタイルを見つけて出す。住み手が主役。地方には、それを受け止めるしなやかさがある。私の趣味の一つに音楽とオーディオがあった。

中学生時代が原点となるオーディオ歴は、五十年をはるかに超える。しかし、東京のマニシオン生活では、音楽再生には制約が大きい。仕事の忙しさもあって、気がついた時には、封印して三十年以上が経っていた。そして、二地域居住。古民家の改修がオーディオへの思いを再生させた。MacintoshとiMacのモニタースピーカーから再生されるクリアーでエネルギー的な音。オーディオファンであれば一度は洗礼を受けているはずだ。定評のあるジャズ、ポップ系ばかりではなく、ピアノ、オルガン、チェロ、オーケ



上：大藪の家と畑。庭先の畑では手狭となったため、琵琶湖側（写真左側）の農地を60坪ほど借りて野菜を育てている。  
 右下：ニンジンの花にとまったデントウムシ。  
 左下：畑のまわりを種を蒔いて育てたヒマワリ。夏から秋まで咲き続ける。



右上：増築されていた部分の2階を14畳大のオーディオルームに改修。古民家暮らしにあわせて購入していたJBL-4344MK IIとMacintosh MA6900を設置した。  
 右下：Fender アンプは東京からの引っ越し組。ギターGibson E336は、マホガニークリ抜き、メープルトップの人気モデルでアメリカから入荷するとすぐにSOLD！となる。  
 左：JBL-4343 シリーズ最後のモデルとなるスタジオモニター 4344MK II。昭和51（1976）に発売されたモデルから四代目にあたる機種。今は生産中止の製品なので、東京のレストアショップに発注し、入手した。

家のある大藪は、江戸時代からの古い集落である。平成七年四月に湖岸道路ができるまでは、集落内をバス、トラック、乗用車が走り抜けていた。今は、地元車の車のみが行き交う静かな道になっている。

玄関を開けると、風のある日は湖岸に打ち寄せる波音がさわさわと聞こえてくる。陽が西に沈む頃、空の色が青色に染まり始めるのを見て、ゆつくり湖岸に足を運ぶ。滋賀県の六分の一を占める広大な水面が目の前いっぱいには拡がる。北に、長浜の市街地が水平線の上に見える。対岸となる西には、比良山系が藍色のシルエツトをくっきりと見せる。肉眼では見えないが、湖西のマキノ、今津、高島のまちに暮らす人々の気配が伝わってくる。

気がつくくと刻々と変化する空に、フラスコ画を思わせるような淡い茜雲が拡がっていた。

滋賀県立大学名誉教授

### 琵琶湖のほとり...

ハクサイ・コマツナ・ミズナ...。新鮮野菜、安心野菜が食卓に上る満足感は、何ものにも代えがたい。良い土で育てた野菜は、甘いことも知った。

田舎で本格的に農業を志す。都市の喧噪のなかで考えると、そこにユートピアがあるかのように思い込んでしまうが、現実には、結構厳しいことを知っておく必要がある。農業で経営を成り立たせるには、大規模・大量生産が前提となる。農地を持たないで安定的に農業収入を上げることには、並大抵ではない。まずは「自給自足」と「有機野菜」づくりを目標に、土を耕す生活に慣れること。それでも、年間の作付け計画、畑の耕耘と土作り、種まき、苗植え付け、草取り、水やり、間引き、支柱掛け、害虫の防除...。野菜づくりには、植物への愛と根気と、体力が不可欠だ。

農的暮らし、半農半Xなど、農業や園芸で自分流の生き方を目指す人たちが増えている。丁寧に耕され、作物を育てられた農地は、美しい。田舎暮らしは、自分の土地で野菜づくりができるばかりではなく、耕作が及んでいない土地を一時的に借りて、野菜づくりや花卉園芸にチャレンジする機会を与えてくれる。

土を耕し、種を蒔き、苗を育てる。季節の訪れを待ちながら、自分の菜園を創り上げていくことは楽しい。育てた野菜たちから思いがけない喜びがプレゼントされる。苗の調達、水やり、収穫物の交換など、隣近所で菜園生活の輪が広がることも心強い。

### 新たなチャレンジ。菜園生活！

春。ダイコン・ニンジン・ホウレンソウ・ジャガイモ・スナップエンドウ...。畑は、賑やかになる。夏。トマト・ナス・キュウリ・シントウ・オクラ・トウモロコシ・ウリ・スイカ・サツマイモ...。秋。タマネギ・ニンニク、

ストラなどクラシック系のソースに対して、透明感と臨場感に溢れた再生で音楽を奏しませてくれる。灯りを消した部屋で聴くシヨパンのノクターン。最近では、モーツァルトやシューベルトのソプラノ歌曲や日本歌曲を聴く楽しみが増えた。ラフマニョフのヴォカリーズから野口雨情の童謡・歌曲まで、美しい音楽が改修したばかりの部屋に満ちあふれる。

「音」と私の出会いは、「EPOC」という口径8インチの美しいスピーカーユニットの再生音を聞いたことに始まる。技術の進歩デジタル化の波のなかで究極のアナログ世界。スピーカーユニット、ボックス、部屋。デジタル技術の恩恵を受けつつも、アナログの心地よさには、独特の世界がある。最近、そこにGibsonとFenderが仲間入りしたが、十年遅かったかもしれない...